

コミュニケーション能力を養う「情報」

ネットワークを利用した意見交換の提案

所属・氏名（大阪府立 ^{くじま}柴島 高等学校 坪内 誠道）

情報の授業ではコミュニケーション能力の必要性があげられている。では、具体的にどのようにしてコミュニケーション能力を育成するのか、その方法について考えてみた。

1. 「社会と情報」の目標

本校では教科・情報として「社会と情報」を選択しており、その目標は指導要領の中で「情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる。」とされている。情報機器や情報通信ネットワークの発展はめまぐるしく。情報を収集、処理、表現する能力は飛躍的に高まった感がある。しかし、本校でもそうだが、情報の授業で想定していた事態を超える事象が様々な場所で起こっている。例えば、いたずらを Twitter で公表するなど、通称バクッターと呼ばれる事象などである。私自身も情報の授業では著作権違反、ネットワークの不正利用など、法律に抵触する事象や人権侵害に関する事象を扱ってきたため、これらの事象については後追いの指導にならざるを得ない。つまり、その事象が生じたことで新たに指導内容を加えることになる。そのままでは新たな事象が生じるたびにどんどん指導内容を加えることになるのではないかと畏怖している。今、問題とされている事象、またはこれから生じるかもしれない事象についてはネットワークに意見を投げかけたためにおこる影響を想像できないことによって起こっているのではないかと考えている。つまり、ネットワークの影響力の欠如によって起こるのではないかと考えることもできる。ならば、ネットワークの影響力をどのように教えればよいのだろうか。

2. ネットワークの影響力

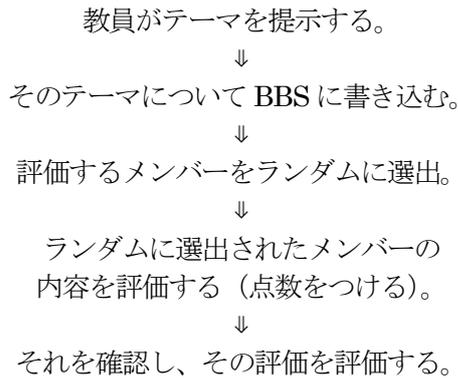
生徒たちの考えるネットワークの影響力とは何であるかを考えると、生徒たちの考えるネットワークとは友人同士や知人同士によるコミュニケーションと思われる。その中で影響力とはあくまでも、友人にどのように見られるのか。知人がどう思うのかである。たとえそのツールが Twitter であっても、そこで友人以外の者が

閲覧していたとしても、基本は同じであると考えられる。その場合、ほとんどの場合はコミュニケーションをしている友人同士、または知り合い同士で情報のやり取りが行われ、リアルな世界でのバックボーンをもとに評価が行われ、問題が生じた場合、リアルな場所で解決できることが多い。なぜならば、そのコミュニケーションを利用する友人、知人にはリアルな世界のバックボーンを共有しているからである。そのコミュニケーションの場に全くリアルなつながりのないものが存在しているときに、その人がリアルな世界のバックボーンを理解していないことをほとんどの生徒が意識していないと思われる。つまり、かれらのネットワークの影響力とは友人、知人に対してのものである。彼ら高校生の経験値からするとそれは当然である。ネットワーク上の友人、知人が主である高校生も存在するのだが、よほどのことがない限り彼らの友人、知人はリアルな世界に存在する。

3. 生徒の発言はどのように評価されるか。

先に述べたとおり、生徒たちのネットワークの発言のほとんどはリアルな世界のバックボーンを共有する者に評価されることが多い。ならば、できるだけリアルな世界のバックボーンを共有しないものに評価される機会を作ることができれば生徒はネットワークの影響力を実感できるのではないかと考え、本校では校内のイントラネットを使い、あるテーマで BBS に発言し、それを相互評価する仕組みを作り、生徒にそれを使わせてみた。

コミュニケーションの問題は自分の意図したことがうまく相手に伝わるかどうかである。このツールを用いると、自分の意図したことがうまく伝わったかどうかを数字で見ることができるといえる。つまりどう評価されたかを知ることができるものである。どのように評価されるかを説明すると以下のような流れになる。



導方法に工夫を加え実施したいと考えている。

本校では評価されるメンバーをクラス単位、男女別、学年全体の3つの中から選べるようにしている。これはリアルな世界のバックボーンのある程度ある者の評価から、リアルな世界のバックボーンのあまりない者の評価を体験させるためである。

ここで行う評価は数字で表し、1人の持ち点を決め、それを評価する人数に割り当てるという方式をとっている。本校では持ち点を割り切れない数字にしている。例えば、持ち点は10点で7人に割り振るというように。このことにより同じ点数をつけることができるが、自分の評価しなければならない考え方の優劣をつける必要が生じる。また、評価する場合その根拠をコメントするようになっている。これは点数とコメントがリンクしているかが、他人を評価する上で最も大切なことであると考えているためである。根拠を考え、示すことによりこのツールの目的を達成できると考えている。

さらに評価に対しての満足度を応えさせることにより、ネットワークでの発言がどのようにとらえられるかを実感することができる。

4. 実際に実施してみた

このツールは昨年度に作成し、開発しながら授業で実施していった。本校では BBS に書き込む前にグループで討論させた。そのことによりそのテーマについて、さまざまな考えがあることをリアルな世界で実感させたうえで、BBS に書き込ませ、評価させた。これはこちらの発問に対し、どのように反応したらよいかかわからない者にもできるだけ参加できるように配慮するためである。生徒の授業評価アンケートから多少の戸惑いは感じられるが、このツールを否定する意見は見受けられなかった。このツールを使い始めて2年目になる。発問の内容や指